

国際会議報告

2021 中国伝統色彩学術年会への参加報告

Report of Participation in the 2021 Annual Academic Conference on Chinese Traditional Colors

國本 学史

Norifumi Kunimoto

慶應義塾大学, 埼玉大学, 黄岡師範学院

Keio University, Saitama University, Huanggang Normal University

1. 2021 中国伝統色彩学術年会

筆者は、2021年11月12-13日、中国北京で開催された、「2021 中国伝統色彩学術年会」に参加したため、本稿にて参加報告を行う。本年は、日本画家・東京藝術大学大学院教授の荒井経氏、日本建築装飾技術史研究所所長・国立台湾芸術大学客座教授の窪寺茂氏、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所副所長の早川泰弘氏、関西外語大学名誉教授・日本色彩学会関西支部顧問の吉村耕治氏、慶應義塾大学/埼玉大学非常勤講師・黄岡師範学院特聘教授の國本学史の5名が、日本からの招聘研究者として参加している。年会は2日間に渡り、第1場から第8場までのセッションが、それぞれ講演者3-4名と主講人(司会)、評議人(評価)1名ずつがセットとして展開する。中国の講演者は、総勢22人であった。本会はこれまで、英国・仏国・香港・マカオ・韓国・台湾といった国・地域の研究者を招聘しているが、昨年に引き続き、本年も主たる交流先として日本が選ばれ、5名の日本の研究者が参加した。

らの要請もあり、全講演がオンラインで行われた。講演は同時接続・録画の配信を視聴することができる。微信(Wechat)で登録を行い、指定のアドレス・QRコードにアクセスすることで、視聴参加することができるシステムである。視聴登録者は、昨年の同会についての報告時(2021年11月27日確認)には23,766人の登録者を数え、関心の高さが感じられた。本年は全面オンラインになったことも影響したのか、さらに関心が高まったようで、会議終了時の登録者総数は、2021年11月13日19:06分(日本時間)の時点で80,354人、2021年12月13日現在は91,244人である。

(https://app66eeofmr3685.pc.xiaoe-tech.com/detail/_l_618684c4e4b0c005c98ef0c9/4?fromH5=true, 2021年12月13日21:52確認)。中国の伝統色彩研究が、多くの人の関心を集めていることが数字となって表れていると言える。講演者は騰迅会議(外国語版ではVooV Meeting)にアクセスし、通訳・会議音声の日本語訳チャンネルは、Boomというアプリが使用された。

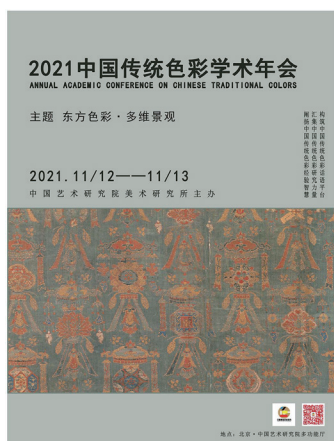


図1. 2021 中国伝統色彩学術年会
会議ポスター・Webタイトル画像
画像は「中国伝統色彩学術年会」より提供

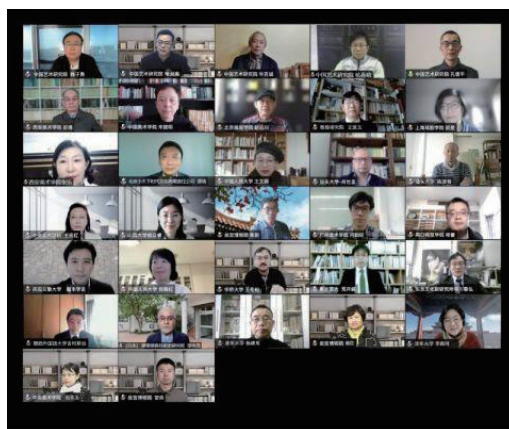


図2. 2021 中国伝統色彩学術年会
参加者参加による記念撮影(Web上)
画像は「中国伝統色彩学術年会」より提供

2. 学術年会のオンライン開催

昨年の中国伝統色彩学術年会は、中国の研究者は中国芸術研究院現地にて講演を行い、日本からの参加者のみオンラインでの講演となった。しかし、本年は新型コロナウイルスの感染拡大を警戒する北京市当局か

3. 伝統色彩学術年会の2021年度のテーマと構成

本年度の伝統色彩学術年会のテーマは、「東方色彩：多維景觀」で、通訳を担当された朱波氏と当方で、「アジア色彩の多次元的な景觀」と訳すべきかどうか意見を交わした。とは言え講演者は同年会から厳密な研

究テーマの限定は求められず、多彩な講演内容が見られた。

大規模な国家プロジェクトである同会への関心の高さもあり、中国国内の様々なメディアの注目がある。会議開催にあたり、著名な大学・博物館所属の研究者からの録画コメントが放映された。また、会議の初めには、中国芸術研究院院長の韓子勇氏より開会の辞が述べられ、中国芸術研究院美術研究所元所長の牛克誠氏により、同会の主旨説明や開催経緯等が説明された。牛氏は主催者として閉会の挨拶も述べられるが、講演者全員の研究内容や質疑を順不同にコンパクトかつ的確にまとめて言及され、優れたまとめとして参加者は2日間の会議内容を振り返ることが出来る。



図3. 中国芸術研究院美術研究所元所長 牛克誠氏
画像は「中国伝統色彩学術年会」より提供

オンラインでの開催となることで、普段来られない人の参加がかない、発言の機会も広く開かれた会となることが牛元所長よりコメントされた。現代生活への影響が期待された主旨の通り、小中学校の教員から大学院生、企業経営者、デザイナーまで幅広く質問者が居た。伝統音楽と伝統色彩の残存比較についての、音楽学院（音楽学部）の学生からの質問は印象的であった。質疑は時間の関係もあり、質問者は講演者事に先着順で1名ずつ、評価人の講評中に質問を動画で撮影し、講演者の回答を聞くスタイルとなる。

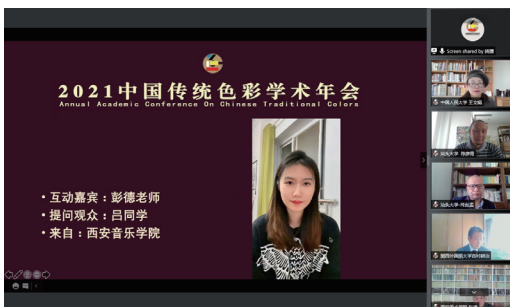


図4. 西安音楽学院・呂同学氏による質問

4. 日本の研究者の講演

日本の研究者による講演内容を、講演順に沿って簡

単に紹介する。まず吉村氏は、五色不動や密教等に見られる例を挙げられつつ、日本の物語や食材等に表現された五色について紹介された。國本は、日本において「わび・さび」と言われるような渋味・地味の色彩への嗜好について、中国と日本の思想史や景観の観点から検討を行った。荒井氏は、絵画の白色色料の様々な材料を比較され、日本で貝殻の胡粉が用いられた歴史や経緯について技法的な側面から検討・考察を述べられた。早川氏は、荒井氏と胡粉の話題を共通させ、日本で白色の色料として胡粉を用いるようになった時期はいつ頃からか、また白色色料の歴史的な変化について報告された。窪寺氏は、日本の建築装飾における唐木色付の特殊性について、日光東照宮などを例として、それ以前の時代の技法を超える必要性としての色彩表現、という視点から説明された。

5. 研究動向と特徴

報告者は、2018年より同会に招聘されているが、同会における講演は、中国伝統色彩の名の通り、伝統的な色彩文化の研究が多い。一方で、西洋的な色彩体系の枠組みとは別の形で、例えば東アジア・中国的な尺度による色彩体系・理論についての希求に答えようとする動きも活発であるように感じられる。いわゆる五色や衣服・顔料について緻密な研究がある一方で、「新しい」色を都市計画や社会経済にどう実現・活用するか、といった視点も論じられる。伝統色彩研究を「古い」文化芸術の研究に閉じ込めず、未来の視点を導き、社会との関わりを文化研究から喚起しようとする試みは優れたアプローチである。文化研究が話題になりにくい昨今の日本と比較すると、社会への訴求と社会からの関心を相互に充実させるべく同会が機能している状況は、我々も大いに参考とすべきであろう。さらに若手研究者を中心にした、「中国伝統色彩研究青年論壇」の開催も翌月に実現し、将来世代への学問継承が期待される点も注目できる。当該については、稿を改めて別途報告したい。



図5. 動画でコメントを述べる中国美术学院色彩研究所所長の宋建明氏